出　張　報　告　書

令和６年３月２７日

会派名　希政会

会　長　石垣直樹　様

出張者氏名　石垣直樹、里見哲也

下記のとおり出張したので報告します。

記

<table>
<tr><td>出張期間</td><td colspan="7">令和６年３月２５日（月）～令和６年３月２７日（水）［3日間］</td></tr>
<tr><td rowspan="12">出張概要</td><td rowspan="3">①</td><td>月日</td><td>3月２６日</td><td>市町村名</td><td>宿毛市</td><td>会場</td><td>宿毛市中央支所</td></tr>
<tr><td>目的</td><td colspan="5">スタートアグリカルチャーすくもの取組みについて</td></tr>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="5">一次産業後継者育成・確保について</td></tr>
<tr><td rowspan="3"></td><td>月日</td><td>3月２６日</td><td>市町村名</td><td>黒潮町</td><td>会場</td><td>黒潮町役場他</td></tr>
<tr><td>目的</td><td colspan="5">黒潮町の災害対策について</td></tr>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="5">官民一体となった災害への備えについて</td></tr>
<tr><td rowspan="3"></td><td>月日</td><td></td><td>市町村名</td><td></td><td>会場</td><td></td></tr>
<tr><td>目的</td><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td rowspan="3"></td><td>月日</td><td></td><td>市町村名</td><td></td><td>会場</td><td></td></tr>
<tr><td>目的</td><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td>所見</td><td colspan="7">別紙のとおり</td></tr>
<tr><td>備考</td><td colspan="7"></td></tr>
</table>

※所見については、別紙（任意様式）で作成して下さい。

２０２４年3月２６日
視察場所　高知県宿毛市

希政会　石垣直樹、里見哲也

スタートアグリカルチャーすくもの取組みについて

一次産業を主たる産業とする網走市において、毎年一定数の離農者がおり増えつつある。先進的な取組みをしている高知県宿毛市スタートアグリカルチャーすくもを視察することで、当市の一次産業の持続可能性を高める参考とさせていただく。

設　　立　平成31年4月1日
設置目的　当法人は、就農者を育成し、農業経営と農業技術を習得するための研修を実施するとともに、農業経営を行うことで、農業振興を図りもって宿毛市の地域の経済及び社会に寄与することを目的とする。

スタートアグリカルチャーすくもは目的にあるように、就農者育成を目的とし、農業技術の習得、農業経営を習得する研修施設である。宿毛市の就農者を育成するために始められた。JAと宿毛市が社員となり一般社団法人化し、非営利での事業活動を行っている。

現在は事務局長1名、職員1名、研修生1名、研修予定者1名、パート職員1名の5名で活動をされている。市内の旧市役所跡地に事務所を設けており、そこから車で5分程度の場所にビニールハウスを建設し、いちご等の水耕栽培を行っている。令和6年度より介護施設2事業者と契約を結び、障がいがある方に箱作りなどの軽作業を行っていただく、農福連携が図られる。障がい者雇用という面からも地域課題に取組む事業である。

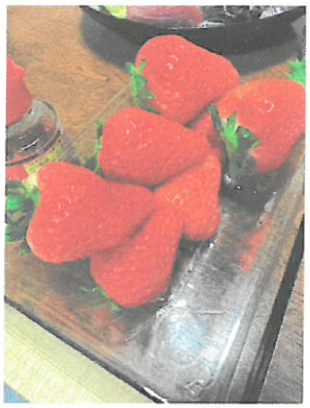
研修生は2年間の研修期間でいちご水耕栽培、フィンガーライム（施設柑橘）の現場で苗づくりから収穫、出荷等全てを学び、同時にスタートアグリカルチャーすくもの事務作業も行うことで、農業簿記について学び、営農計画についても実地で習得していく。

研修期間中の研修生の収入は国と県から年間180万円の支援を得ており、毎月15万円の収入となる。それのみでは生活が厳しいかもしれないが、新しいことにチャレンジする大きな後押しとなることは間違いない。

平成31年の事業開始から6名の方が研修を終えて、内4名の方が宿毛市内で就農し営農を行っている。残りの2名は大月町、中土佐町にて営農している。研修生は全国各地から来ており、現在の研修生も大阪から来られている。すなわち本事業をとおして就農者育成と移住という2つの課題解決が図られている。近隣自治体でも他品種生産の同様な取り組みが行われており、希望した作物を作りたいというニーズに答え研修生の取りこぼしをなくすべく、5地域での連携が図られている点は特筆すべきであろう。

現在の課題としては、ビニールハウスの高騰である。２棟で６,０００万円程度と新規就農する上で大きな投資額となる。そこでスタートアグルカルチャーすくもで海外製の安価なハウスを購入し、リースによる貸し出しなどが検討されている。

網走市においても高齢化、人口減少などの課題から移住者を求める事業を行っているが、結果を残せてはいない。やはり移住には動機が必要で、地方に住みたいという想いと、経済的な活動である仕事もセットとして含めて検討する必要がある。宿毛市のように理になかう施作が求められている。



２０２４年3月２６日
視察場所　高知県宿毛市

希政会　石垣直樹、里見哲也

黒潮町防災の取組みについて

南海トラフ巨大地震が発生したさいに、全国で最も高い３４メートルの津波が来ると言われている地域、高知県黒潮町では津波避難タワーの整備や町全体で防災訓練を行うなど、住民と行政が連携し対策をすすめている。

想定外、想定外の津波、想定外の地震、想定外という言葉を耳にするようになった。想定された震災などないが。南海トラフ地震だけは危機が迫っていると想定されている。我が地域においてもいつ何が起こるのかは誰も想定できない。災害が少ない地域だと言われているが、その保証はない。災害に備えることは全国どこの自治体においても必要不可欠であり、住民の生命と財産を守る義務が行政にはあるのだ。

高知県黒潮町では過去大きな災害が 114 年平均で起こっている。直近では 1946 年昭和 21 年に発災した昭和南海地震である。

昭和南海地震は昭和 21 年 12 月 21 日の午前 4 時 19 分過ぎに塩岬南方沖（南海トラフ沿いの領域）７８キロメートル、深さ２４キロメートルを震源とした Mj8.0(Mw8.4)のプレート境界型巨大地震である。南西日本一帯では地震動、津波による死者 1330 名、行方不明者 113 名という甚大な被害が発生した。

現在、南海地震から 78 年が経過している。南海地震の 92 年前には安政南海地震が起こっている。平均 114 年といえど、いつ何時想定外のことが起こってもおかしくはない。そんな中、黒潮町は住民の生命と財産を守るために様々な取組みを行っている。

基本理念を「避難放棄者を出さない」として諦めて逃げ出さない町民を出さないように、全町民が共有する言葉を決めている。「あきらめない」「揺れたら逃げる」「より早く」「より安全なところへ」。最大震度７、最大津波３４ｍの町で犠牲者ゼロを目指す。そのために１０の対策・取組みが行われている。

①防災地域担当制、②避難空間の整備、③戸別津波避難カルテ、④地区防災計画、⑤木造住宅耐震化等の促進、⑥避難所運営マニュアルの作成、⑦防災教育プログラム、⑧告知放送システム、⑨町備蓄計画、⑩防災訓練の開催。

上記１０項目に沿い様々な取り組みをされている。地域を消防団の分団で分けて、それぞれ担当の町職員を任命して、地域の実情にあった防災計画の策定、改定を行うなどきめ細かい要素が詰まっているが、今回はハード面での取組みを重点的に視察させていただいた。

「黒潮町防災タワー」避難困難区域の解消を目的として町内 6 地区で津波防災タワーが建設されている。津波が来た際に避難する場所である。最新のタワーでは地盤からの高さが２２ｍ、収容人数が 230 人と巨大な津波避難タワーが建設されている。午前中に視察した宿毛

市でも津波避難タワーが存在し、現在高知県内では２００箇所以上の津波避難タワーが建設されているそうです。実際に登りましたが、家から草木が生えた山を駆け上るのではなく、地区地区に存在する津波避難タワーに登る方が現実的である。高台への避難路も存在するが、黒潮町の地形は海沿いの谷間に扇状地があり、そこに集落が点在している。町内には数箇所その様な場所が存在する。集落から山が近いが急斜面な場所が多く、中々避難しづらい地形となっている。

避難放棄者を出さないという考えのもと、避難計画を作成し避難訓練を実施する。防災教育プログラムを作成し、子どもたちに教育する。備蓄品の確認、更新は住民たちを中心に行っている。

網走市においてもディグなど地域や団体で行われてはいるが、「訓練以外の事はできない」というように、災害への備えは常に行い住民の生命、財産を守っていく必要がある。網走市新庁舎が避難機能を備えてはいるが、津波避難タワーについても一考する必要があると感じた。